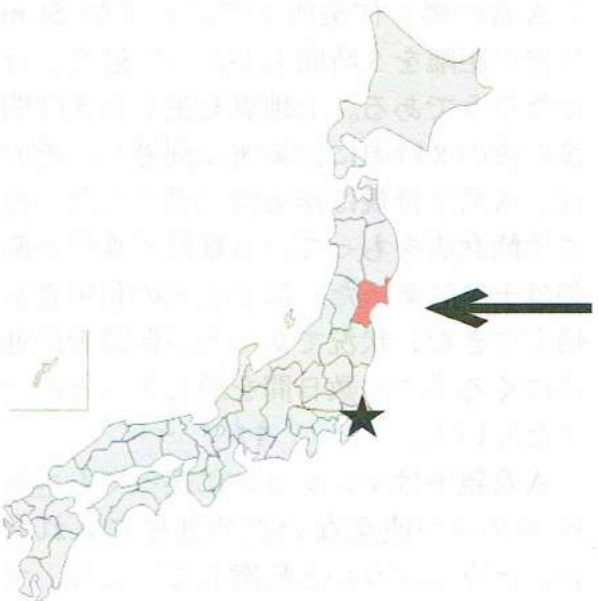
東日本大震災と障がい児・者の状況(2)

～大震災から１年～

（注）分科会名称は「障がい」を使用するが新聞記事などはその表記に従って，「障害」とすることをお断りする。



宮城歴教協　仙台支部　高橋　誠

はじめに

この報告は昨年の福岡大会（レポート参加）報告の続編である。便宜上，前年の報告は，「状況(1)」とする。

2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災で，障がいのある人や子どもたちがどのような状況に置かれたかを，聞き取りと地元新聞（主に『河北新報』）の記事で構成して報告するものである。

災害弱者である障がい児・者の状況を，昨年のレポートをまとめた直後の 2011 年 7 月から 2012 年 7 月までの 1 年間の新聞記事を時間経過を追いながら，その困難な状況を浮き彫りにしていく。（以下，1～11は見開きで記事に対応）

1 (1) 見出し 2011年

7／25　学びや通学 足絶やさず

7／29　仮設 バリアフリーに

震災後から夏休み前までの通学の困難さを伝え，ボランティア団体による送迎が一区切りという記事が載った。

通学区域（学区）が広いK特別支援学校は国道・県道が海岸線に沿って所々寸断され通学用大型バスの通行が制限された。道路の復旧に伴って活動が終了するという内容であった。

また，仮設住宅の問題は，障がい児・者が優先的に入れず，遠くの親戚宅に間借りしたり，1階が壊れた自宅の2階に住んだり（この状態でも「自宅避難」と呼ばれている）しながら通学している困難さがあった。ようやく仮設住宅の抽選に当選してもスロープがなかったり，車いす用の駐車スペースがなかったりと不備が多かった。そのことを訴えた内容である。

(2) 教え子たちの動向…A君のこと

筆者のすでに成人している障がい児学級初期の教え子たちが，震災直後どのような生活を送ったかを OB 会（毎年海の日開催）で聞き取ることができた。

A君は車いす使用の肢体不自由者で，市内中心部のマンションに父母と共に暮らしていた。停電によりマンションのエレベーターは停止してしまったが，幸い通所している仙台市南部の作業所にいたときに被災していた。母親は停電で信号機がつかない大渋滞の中，市内中心部からA君の働く作業所までのわずか 5Km ほどの距離を 5 時間もかかって迎えに行ったそうである。大地震発生から 5 時間後の夜の 8 時頃に作業所に到着し，その夜，A君と母親は作業所で過ごした。そこは飲食店をもっている施設で食料の備蓄は十分にあった。ほとんどの利用者が帰宅できない状況であったが保護者が迎えにくるまでの数日間を過ごすことができたという。

A君親子はマンションに戻ってもエレベーターが使えないため部屋に入れない。どうしようかと思案していたら，マンション近くの YMCA が障がい者・高齢者の避難者を優先的に受け入れているとの情報が入った。息子を迎えに行くと書置きしてきただけで通信手段が途絶えていたので，父親が自宅で戻らない妻子を心配していたであろう。市内中心部に戻って自宅近くの YMCA のお世話になることにした。そこでは若手男性スタッフがA君の車いすを抱えて移動介助をし，温かい食事を親子に提供してくれ，手厚くもてなしてくれたそうである。震災 5 日後に電気が復旧し，マンションのエレベーターの安全が確認されたさらに 7 日後にA君親子は自宅に戻った。

1

気仙沼 支援学校生を東京の団体が送迎

学びや通学 足絶やさず

主要道復旧で活動一区切り 「援助 今後も」

東日本大震災でバスの運行ができなくなった気仙沼市の気仙沼支援学校で，生徒を車で送り迎えしてきた東京の団体の活動が旬日，終了した。保護者や学校は「道路が復旧していない時期から通学の足を確保してもらい本当に助かった」と感謝している。

送迎の支援をしたのは，NPO法人「東京都発達障害者支援協会」と社会福祉法人「東京都社会福祉協議会知的発達障害部会」の2団体。

仙台市南部の陸前高原町の児童が生徒さん30人を迎えに行き，2時間かけて学校に送迎されたため，送迎開始の約2週間後，道路の復旧で活動は一区切りとなった。「今後は通学路の状況を見ながら，必要があれば再開したい」という。

活動は，3月28日，ボランティアの学生ら2人が，ワゴン車で，迂回ルートを使って学校に入り，生徒を乗せて帰った。

主要道路が復旧したため，19日が最後の運行となった。高等部1年の千葉翔太さん(15)の母親で主婦のモモさん(41)は「除雪車が入ったので，送迎事が大変だったので，感謝している」と話す。高橋正彦校長は「通学を諦めていた時期もあった。支援に本当に感謝した」と語った。

仙台発達障害支援センターの笹山孝弘理事長は「約2カ月の運行だったが，継続的な支援ができて良かった。今後も協力して良い環境に携わっていきたい」と話している。

児童生徒の送り迎えを担ったワゴン車，19日が最後の運行となった＝気仙沼市松崎の気仙沼支援学校

入り口のバスが通行できなくなったことを知った団体がある保護者を出し迂回，小型ワゴン車で，迂回ルートの細い山道を走った。

気仙沼

仮設 バリアフリーに

障害者団体が市に要望

石巻

東日本大震災で被災した重度の障害児らの生活困難になっているとして、「石巻重症心身障害児（者）を守る会」（加藤美智子会長）は28日、障害児らが生活する仮設住宅のバリアフリー化などを求める要望書を石巻市に提出した。

同会は、被災した障害児らの①仮設住宅や借り上げ賃貸住宅のバリアフリー化や工事費の補助②仮設住宅の駐車場への車いす専用スペースの整備③医療的ケアに対応できる短期入所施設の設置―などを要望。市が策定する避難者支援マニュアルに、重症心身障害児（者）のケアを十分に盛り込むことも求めた。

障害児と家族ら8人が石巻市役所を訪れ、要望書を提出。重い意識障害がある石巻特別支援学校1年新田綾女さん(12)と出席した母親の理恵さん(41)は「仮設住宅に入居したが、玄関が狭くスロープもない。車いすでの出入りが困難になっており、改善してほしい」と語った。北村悦朗副市長は「不便をかけ申し訳なく思う。スピード感を持ち、対応していきたい」と述べた。

同会の会員は石巻市、東松島市などの障害児（者）の家族ら25人。現在、仮設住宅で生活する新田さんら3人が、特に早急な支援が必要な状態にあるという。

北村副市長に要望書を手渡す「守る会」の加藤会長（左）＝28日、石巻市役所

ていた。亀井さんの歩みを写真と年表で振り返るパネルの展示もあり、献花を終えた参列者らが在りし日をしのんでいた。

その後は？

2 (1) 見出し 2011年

8／6福祉仮設第１号完成

8／9入浴剤作りで再起

8／17被災地にアザラシ型ロボ

高齢者向けではあるが福祉仮設と名の付いた仮設の第１号ができたことが報道された。この段階で障がい児・者向けはまだ整備されていない。仮設住宅も沿岸部の各地に急造されたが，出入口にひさしがないために雨の日の出入りが大変なことやユニットバスに追い炊き機能がないために人数が多い家族や生活時間にばらつきのある家族には使いにくいことなどがテレビニュースなどでも報道されていた。

全国各地の福祉作業所からの支援で宮城県内の福祉作業所が再開していることを伝えた記事が載った。この記事が載ったころ，筆者が以前からかかわっている福祉施設Ｓの築120年を超える旧宅（母屋）は危険家屋に指定され，取り壊されることが決まっていたのだが，いよいよ取り壊しが始まった。3.11の本震ではさほど被害はなかったのだが，4.7の余震で大きく傾き，危険な状態に陥った。幸い新しい作業場が大震災以前より稼働していたので１か月後には弁当宅配の通常業務が再開できた。しかし，多くの福祉作業所では再開がままならず，新聞記事のように全国各地からの温かい支援を受けて再開にこぎつけたことが報道された施設もあった。

アニマルセラピーは広く実践されているがロボットセラピー（とでも言うのだろうか？）のことはこの記事で初めて知った。試験的なロボットの貸与で，一台が高価なために，残念ながらその後の広まりはなかったようである。

(2)教え子たちの動向…Ｂ君のこと

Ｂ君はクラッチ使用の肢体不自由者で，地域の福祉作業所Ｓで働いている。ライフラインが寸断され，食料確保も困難な状況になったとき，秋田県に嫁いでたＢ君の姉が秋田から駆けつけた。そして秋田に避難するように勧められ，姉の運転する車で秋田へ向かった。父親は仕事で仙台を離れることはできなかった。

東北６県の日本海側は幸いにもライフラインは早く回復していた。宮城県内でガソリンの入手が困難な状況で，山形に給油に行くドライバーもいた。宮城県内では数時間行列に並んでようやく10ℓ手に入る程度であったり，並んでも整理券をもらえなければ無駄足となったりする状況で，山形なら満タンにして戻ってくることができた。同様に秋田なら物資が手に入る状態だった。当時，東北自動車道が寸断され，東北地方の太平洋側３県に入るのには新潟あるいは山形経由が最適なルートとなっていた。新潟や山形でガソリンを満タンにしてから宮城，岩手へ救援物資を運ぶのが安全策となっていたのである。

秋田に行ったＢ君親子は大震災から約２か月後のゴールデンウィークが終わる頃にようやく仙台に帰ってくることができた。支援物資が安定的に供給され，ライフライン（特に都市ガス）が復旧したと父親から連絡が届いてから帰ることができた。

2

福祉仮設 第1号完成

仙台 高齢者11人が新生活

バリアフリー設計の「新居」で蓬田社長（右）の説明を受ける入居者 ＝5日、仙台市太白区

東日本大震災で被災した高齢者や障害者が共同住宅（グループホーム）で住む、仙台市太白区のあすと長町に完成した「福祉仮設住宅」（型仮設住宅）の第1号が5日、入居した。

屋の2棟（定員計18人）に、認知症の高齢者11人が入居した。

入居者は70～90代。津波被害で使用不能になった若林区種次のグループホームに代わり、新たな生活を始めた。各棟に介護職員2～3人が常駐し、食事や入浴など身の回りの世話をする。

全室個室で、建物中央に居間兼食堂を配置。浴室や調理室、洗面所のほか、職員用事務室を整備した。段差をなくし、手すりを付けたバリアフリーになっている。敷地内には畑もある。

被災したグループホームの運営会社リブレが入居者のケアを担う。県認知症グループホーム協議会を務める同社の蓬田隆一社長は「個室でゆったり過ごせる半面、慣れない環境に戸惑う人もいる。きめ細かい配慮を心掛けたい」と話った。県長寿社会政策課によると、福祉仮設住宅は宮城4市2町で33棟を建設中。

山元 被災の障害者事業所「工房地球村」

入浴剤作りで再起

バスボム作りに取り組んでいる利用者とスタッフ ＝山元町の工房地球村

溶けると「ありがとう」

東日本大震災で被災した山元町の障害者支援事業所「工房地球村」が、長野の施設の支援を受けて新しい製品作りに乗り出した。特産のイチゴジャムといった加工品で知られるが、入浴剤「バスボム」を新製品に選んだ。新たな収入源にしようと製造に励んでいる。

バスボム作りは、障害者事業所の経営コンサルタントが集まり、製品化を通じて被災地の障害者を支援するミンナのためカオウ（33）こが材料を持参して地球村を訪れ、作り方を指南した。

商品の「ありがとうバスボム」はテニスボール大で、ピンクや水色など4種。発泡しながら溶けると「ありがとう」と書かれた紙が出てくる。震災後、被災地で作ったために考案され、徐々に知名度も上がっている。

「復興に協力してくれた人への感謝の気持ちを伝えるお品。同じ被災者仲間だからできる支援で、復興のきっかけになればいい」と場所長は話す。

バスボムは一個300円。

収入源だった農園事業は津波で失い、ジャムやピクルスといった地場野菜の加工品の製造再開の見通しも立たない。地球村職員の田口ひろみさん（47）は「どの施設も大変ではずだのに、応援ありがたい。バスボム作りを通して自信を取り戻した利用者もいる。新しい仕事に挑戦し、前に進んでいきたい」と話している。

隣接する地球村では、建物の被害は少なかったものの、津波で職員1人が犠牲になり、利用者の半数近くが家を流され仮設住宅から通う。その中で利用者の渡辺浩さん（37）＝山元町＝は「メッセージを見つけてもらえたら、うれしい」とバスボム作りに精を出す。

長野の施設、材料や道具支援

塩釜出身の外交官ら支援活動

被災地にアザラシ型ロボ

多賀城小・石巻支援学校に無償貸与

セラピー効果に期待

3 (1) 見出し 2011年

8／28 小さな命の鼓動支える電源を

10／22 在宅患者へ命の発電機

重度障がい児・者と発電機の問題は震災による停電で命の危機に瀕し大きな課題となっていた。状況(1)で取り上げた3／17付「在宅医療綱渡り 停電とガソリン不足深刻」の記事は大震災以前から連載中だった遷延性意識障害の患者についての続報であったが重度障がい児・者の状況を想像するのには十分であった。しかし，実際の重度の方の状況が報道されたのは，筆者の知る範囲では8／28付が初めてであった。記事のリードには次のように書かれている。

「生後9か月で難病のミトコンドリア病と診断され，自宅で人工呼吸器を付けて闘病生活を送る男の子が気仙沼市にいる。○○ちゃん(4)。東日本大震災の停電の際，命綱の機器の一部が止まった。家族は地震後の混乱と津波の恐怖の中，必死で○○ちゃんを守った。しかし自宅に戻っても余震にさらされ，停電の不安と背中合わせの日々か続いている。」

3.11当日，大震災直後の停電で吸引器が停止，内臓バッテリーで作動したが停止は時間の問題だった。救急車は渋滞でたどり着けない。幸い津波は自宅に到達せず，救急車が到着して病院に入ったのは5時頃で何とか命を取り留めたのである。同じことが4月7日の余震でも繰り返され，この時は山形県で人工呼吸器停止が原因とみられる患者の死亡例も出ていると報じている。

母親は自宅にソーラーパネルの蓄電システムがあれば問題の一つが解消すると考え，義援金などを使って設置できないだろうかと行政に相談していることが書かれている。厚生労働省は4月，人工呼吸器を使う患者の停電時ケアについて自治体に指示したが，在宅環境の改善までは手が回っていない。同省疾病対策課は，発電機の設置について「医療機関の予備電源確保策が中心で，個人に対する助成メニューは今のところない」と話したという。

こんな報道があって2か月近く経とうという 10 月下旬になって発電機が配布されたという報道があった。記事のリードに次のように書いてある。

「自宅で人工呼吸器を使う障害者が停電で命の危険にさらされた東日本大震災を教訓に，NPO 法人「難民を助ける会」(東京)は，人工呼吸器を使用する障害児，障害者がいる宮城，岩手両県の97世帯に自家発電機の配布を始めた。」

続けて配布の経緯が書かれている。

「自家発電機はカセットガス式で，配布は11月上旬までに終える予定。助ける会によると，在宅家族への発電機の支給は災害救助法の対象外。発展途上国に医療支援するドイツの『アクションメディオール財団』に寄せられた義援金などを活用して準備した。」

写真の子どもの例では避難中は手動のポンプ(アンビューバッグ)で酸素を送ったとのことである。

厚生労働省や地方自治体がもたもたしているうちに NPO 法人のおかげで発電機設置への見通しが何とかついてきたのである。

3

小さな命の鼓動 支える電源を

難病の4歳児 人工呼吸器が命綱 気仙沼

震災の停電で危機

母、太陽光蓄電装置求める

のどに人工呼吸器の管を付け、病気と闘う優司ちゃん。母の清美さん(左)は停電時の不安を訴える＝気仙沼市長磯町八沢の自宅

生後9カ月で難病のミトコンドリア病と診断され、自宅で人工呼吸器を付けて闘病生活を送る男の子が気仙沼市にいる。川口優司ちゃん(4)。東日本大震災の停電の際、命綱の機器の一部が止まった。家族は地震後の混乱と津波の恐怖の中、必死で優司ちゃんを守った。しかし自宅に戻っても余震にさらされ、停電の不安と背中合わせの日々が続いている。

ベッドであおむけに寝ているのに、優司ちゃんは、長時間の自発呼吸ができない。のどに詰まるたんを吸引器や、胃ろうから栄養を送る器具などを使って取り除く。そばで見守る母清美さん(41)は震災以来、気が休まる時がない。

「地震でまた停電になったらと思うと、怖くて仕方がない。ほぼ付きっきりで世話をする母の清美さん(41)は震災以来、気が休まる時がない。

3月11日の地震では、二階を見ていた高校2年の姉・行一が、倒れ掛かる家具から優司ちゃんを守った。しかし直後に停電し、たん吸引機が止まった。呼吸器に酸素ボンベ(ガス)があったとはいえ、命は時間の問題だった。

「何かあったら救急車を呼ぶ」。家族で言い交わしていた災害時の唯一のマニュアルに従い、119番したものの何度かけても つながらない。ようやく通じても、救急車は渋滞でなかなかたどり着けない。津波は近くまで迫っていた。

「2人とも殺されちゃうね」。避難しようとする5人の家族を見送った後、母子は自宅の部屋で不安の時をじっと過ごした。幸い、自宅は津波警報を免れた。救急車が到着し、呼吸器を乗せ病院に入ったのは、日も暮れた午後8時ごろだった。何とか命は取り留めた。

同じことが、4月7日深夜の余震による停電で繰り返された。この時は、山形県で人工呼吸器停止が原因とみられる患者の死亡例も出ていた。

「非常時、家族はそばにいてあげれば、大きな力になると思う」と清美さんは訴えている。

■ ミトコンドリア病 細胞の中でエネルギーをつくる働きをしているミトコンドリアの機能低下によって、心臓、骨格筋、脳などに障害を来す病患。2009年に厚生労働省の難病患者に認定された。原因が少なく決定的な治療法は確立されていない。(難病情報センターなどの資料による)

在宅患者へ命の発電機

人工呼吸器使用 宮城・岩手97世帯に配布

東京のNPO

震災時の停電教訓

自家発電機の支援に感謝する氷浦茉奈ちゃん(中央)と母親の典子さん(右)＝21日、名取市美田園3丁目

自宅で人工呼吸器を使う障害者が停電で命の危険にさらされた東日本大震災を教訓に、NPO法人「難民を助ける会」(東京)は、人工呼吸器を使用する障害児、障害者がいる宮城、岩手両県の97世帯に自家発電機の配布を始めた。

◇

自家発電機はカセットガス式で、配布は11月上旬までに終える予定。助ける会によると、在宅家族への発電機の支給は災害救助法の対象外。発展途上国に医療支援するドイツの「アクションメディオール財団」に寄せられた義援金などを活用して準備した。

21日は財団や難民を助ける会の職員らが、筋力が低下する先天性ミオパチー(5)=名取市美田園3丁目=と母親の典子さん(41)を訪ね、発電機を手渡した。

茉奈ちゃんは生後間もなく、先天性ミオパチーと診断された。全介助が必要で、自発呼吸が弱いため呼吸器は欠かせない。

3月11日、3人は自宅で震災に遭った。呼吸器の電源はバッテリーに切り替わったが、停電が早く復旧すると思い、自宅で待機していた。

典子さんがふと窓の外に目を向けると、流されてくる家用車や家屋が見えた。マイカーは夫の誠さん(43)が通勤に使っていた。急いで近所の住民を約10人、車に乗せてもって何とか避難できた。人工呼吸器は持ち出せなかったため、移動中は手動のポンプで茉奈ちゃんに酸素を送った。

自宅は床上まで浸水。6月下旬に戻ったが、自宅の改修などで出費がかさみ、発電機の購入は見合わせていた。

典子さんは「皆さんの支援のおかげで、普通の生活ができそうです」と感謝する。茉奈ちゃんは、自宅を訪れた財団職員のヤン・グルースさん(30)に「ありがとう」と自分で書いた近況付きの七夕飾りをプレゼントした。

4 (1) 見出し 2011年

１１／１２息子の寝息にほっと

１１／１６励ましの一言 大きさを知る

１２／７ 避難所で障害理解手助け「ハートバッチ普及を」県議一般質問で紹介

自閉症者が避難所生活を送ることの困難さが記事になった。震災当初から慣れない環境に適応するのに相当な時間がかかる自閉症児・者は避難所でパニックを起こしたり自傷行為が頻発したりして周囲に迷惑がかかるからと，自家用車で避難生活をしていることが報道されていた。震災から半年以上が過ぎて当時を振り返る形で自閉症児・者の困難な状況が語られるようになってきた。

１１／１２付では「避難所を諦め自宅へ」と中見出しで亘理町在住 27 歳の自閉症の男性のことを詳しく書いている。津波で自宅１階が浸水した家族である。「震災直後，一家が長女夫婦が暮らす仙台市太白区のアパートに身を寄せたころから，○○さんは落着きがなくなった。震災前，○○さんは町内の作業所で豆腐づくりを担当していた。生きがいだった作業所に通えなくなり，生活のリズムが乱れた。なかなか寝付けず，独り言を繰り返す夜が続いた。」

家族は作業所に近い避難所（小学校の体育館）に移ることも考えた。避難所は人があふれ，寝床の仕切りもない。物音を異常に怖がり，知らない人と一緒に寝るのは大変なことと覚悟した。しかし 4 月中旬，避難所の整理縮小が始まっていた。5 月に父親の会社が用意した借り上げ社宅に移り，6 月から自宅の修復を始めた。このころから○○さんは作業所に通い始めた。交通網が寸断された中での通勤は乗り継ぎが多く大変であったが家族の協力を得ながらやがて一人で通勤できるようになり，8 月中旬に自宅に戻ってからは順調に生活を送れるようになった経緯を 11 月に報道されたのである。

この記事が載って間もなく宮城県議会 11 月定例議会が始まった。３年前に県北部（内陸部）のＦ特別支援学校ＰＴＡが製作したハート形３つを組み合わせて「障がいがあります」と書かれたハートバッチのことが取り上げられた。

震災以前に，Ｆ特別支援学校ＰＴＡから沿岸部で児童生徒に津波による犠牲者も出たＩ特別支援学校の児童生徒が，避難所で実際に使用して，一目で周囲の理解を得ることができ，配慮を受けながら避難生活を送ることができたと紹介し，県内に浸透させるようにと知事に一般質問をしたことが１２／７付の記事になった。

この記事では次の一文に注目した。

「震災直後，障害児を抱えた家族が『周りの迷惑になる』と気兼ねし，避難所に入らず，自家用車で寝泊まりした事例が報告されている。」

状況(1)で筆者が直接見た避難所の駐車場で寝泊まりする自閉症の子どもを抱える家族がいたことはなかなかマスコミが取り上げてなかったのだが，ようやく県議会で触れられて，記事になった。

(2)仙台の詩人Ｋさんのこと

3の続きとなるが，Ｋさんは脳性まひなど重度の重複障がいがあり，気管切開し，声を失ったものの，字を習い，筆談で意思疎通ができるようになって詩人となった（詩集『花の冠』は 10 月末，野田佳彦首相の所信表明演説に引用され一躍注目された）。彼女は痰の吸引器を使うので大震災の停電時，車のバッテリーで 3 日間乗り切り，「すごく怖かった。自分が生きているのが不思議だった」と振り返っている。

4

息子の寝息にほっと

避難所を諦め自宅へ

それぞれの「家」③ 安息の地

これから ―大震災を生きる

落ち着かず

励ましの一言 大きさを知る

この人

大越 桂（おおこし かつら）さん

復興を祈る詩が注目を集める

「ハートバッチをご存じか」。6日の県議会11月定例会一般質問で、中島源陽氏（自民党・県民会議）が心身に障害があることを伝えるバッジを取り上げた。震災直後の避難所で、障害児への理解に役立った事例を紹介。「もっと浸透させるべきだ」と強調した。

「ハートバッチ」＝写真＝は3年前、大崎市の県古川支援学校PTAが制作。四つのハートを組み合わせたデザインの上に「障がいがあります」と記されている。

中島氏によると、震災前に同PTAからバッジを贈られた県石巻支援学校の児童生徒が避難所で周囲に「障害がある」と一目で理解され、配慮を受け生活できたという。

震災直後、障害児を抱えた家族が「周りの迷惑になる」と気兼ねし、避難所に入らず、自家用車で寝泊まりした事例が報告されている。

中島氏は「バッジのデザインが浸透し、車の初心者マークのように、見ただけで意味が分かるようになれば、災害時の弱者対策につながる」と県の支援を求めた。

村井嘉浩知事は「障害者に対する理解と意識の啓発に役立てば」と広がりを期待した。

小林伸一教育長は「紹介の機会は設けたいが、抵抗感を持つ人もいる。本人の希望や保護者の思いも大切にしたい」と語った。

避難所で障害理解手助け「ハートバッチ普及を」

中島県議一般質問で紹介

5 (1) 見出し 2012年

2／9 復興支援・防災に生かそう
大崎で座談会

3／15津波から児童どう守る
支援学校の教員ら討論

先の「ハートバッチ」を製作したF特別支援学校の保護者・教員・地域住民・行政関係者が中心となって座談会が開催された記事である。

もう一つが県内の教員養成大学主催の特別支援教育フォーラムの記事である。「東日本大震災」と特別支援教育 ～「東日本大震災」の経験から「特別支援教育」を考える～ と題して，研究者や特別支援学校教員などが報告した。その中で，知的障害特別支援学校アンケートの集計結果が「宮城県下の特別支援学校の被災状況とそれへの対応」として報告された。これは東北6県の特別支援学校校長会が各校の教職員と保護者に実施したアンケートで，震災当時の状況を知ることができる貴重なデータである。たくさんの設問から構成されているが一部抜粋して以下に紹介する。

(2) アンケートより

「大震災の地震の震度は」の問いに，宮城県16校の回答は，震度7…2校，震度6強…11校，震度6弱…3校

「児童生徒の被害状況は」の問いに，死亡5名，建物全壊79名，建物半壊67名

「職員の被害状況」の問いに，死亡1名，建物全壊43名，建物半壊64名

「校舎等の被害」については有16校で100％

「地震発生時の児童生徒の所在」の問いに，学校29％，下校途中(公的交通機関等)5％，(スクールバス)14％，寄宿舎0％，自宅52％，その他0％

「今回の大震災で特別支援学校が避難所となったか」の問いには，児童生徒のみ4校，お断りした0校，地域住民も避難2校，無9校であった。基本的に県立学校は避難所として指定されていないのだが沿岸部の学校では校長判断で避難所となった。

「避難所運営に関してご意見を聞かせて」の設問には，自由記述で次のような回答が寄せられた。

- 避難所のライフラインの確保(電気，水，ガス)を十分に行うことが必要
- 受入は自校児童生徒のみが望ましい
- 短期的(1週間程度)なら対応できるがそれ以上となると施設的に厳しい
- 自閉症児等集団での生活が苦手な児童生徒には住み慣れた学校が避難所として必要
- 特別支援学校が障害児の避難所として最後の砦となることを想定した
- ソフト・ハード両面にわたる整備が必要

「震災後の児童生徒の心理的変化は」の問いに有68％，無32％，続けて「有」の場合のその様子は次のようだった。

- 不安・恐怖(11)
- 情緒不安定・泣く(9)
- 地震に敏感になった(8)
- 摂食障害(食欲不振・多食)(6)
- 睡眠障害(5)
- 自傷・他傷行為・髪の毛を抜く(3)
- 夜尿や失禁(2)，奇声(2)
- PTSD的な症状，生活環境への不適応，避難所に入れない，家の外へ逃げ出そうとする，一人で寝れなくなり一人行動ができなくなった，家族被災による疲労等

「防災マニュアルの見直しの具体的内容」の問いへの自由記述は，次のとおり。

- 通学方法や居住地の再確認
- 特に下校時，保護者の迎えが困難な場

5

復興支援・防災に生かそう

大崎で座談会

在宅の障害者と家族の災害対応を考える座談会「大震災をどう乗り切ったか、どう備えるか」が1月28日、大崎市古川保健福祉プラザで開かれた。

◇

社会福祉法人大崎誠心会（大崎市）の「大崎地域相談支援センターさてら」が主催。東日本大震災の記憶が薄れないうちに問題点を共有するのが狙いで、大崎地域の障害者や支援者、行政関係者ら約80人が参加した。

東北福祉大の阿部一彦教授が座長を務め、3団体の会員が震災体験を基に話題を提供した。

大崎重症心身障害児（者）を守る会の会員は「避難所では医療機器の電源確保が難しい」と指摘。大崎市手をつなぐ育成会の会員は「障害のある息子は今もちょっとした揺れにびくつく。避難所が学校の場合、特別教室を障害者やその家族に使わせてもらえないか」と述べた。

助言者の一人、古川支援学校の今野雅規教諭は「震災で春休みが長引いた際、各教員が近くの子どもたちの家に寄って供、不安緩和などの面から出動するようにし効果があった」と話した。安否確認や情報提た。

医療機器の電源どう確保
在宅障害者対策探る

在宅障害者の震災対策について意見を交わした座談会

津波から児童どう守る

仙台 支援学校の教員ら討論

東日本大震災の経験を特別支援教育現場に生かそうと、特別支援教育フォーラム（宮城教育大主催）が4日、仙台市青葉区の市情報・産業プラザで開かれた。教育関係者ら約70人が参加。国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員の西牧謙吾さんら6人が、特別支援学校の被災状況や児童生

震災と特別支援教育について議論したフォーラム

合の対応
・下校方法について保護者と共通理解
・保護者送迎計画
・送迎サービスの対応
・帰宅困難児童生徒の学校宿泊準備
・不特定の参加者が想定される行事の危機管理体制を加筆
・津波発生時におけるスクールバスの時間毎の避難場所の指定
・安否確認用地区割り担当者の決定
・併設の中学校・地域との連携
・地震に対する対応を県教委の方針に従って見直した。

今後もこのような調査が学校のみならず福祉施設などにも行われることで東日本大震災の障がい児・者の置かれた状況や課題が明らかになるものと期待される。

また，フォーラムでは阪神淡路大震災を経験した研究者からの報告もあり，PTSD の症状は震災後 3 ～ 4 年をピークに増加していく傾向が明らかであるので，心理的な支援はむしろこれからの数年間が大切であることが協調された。

6 (1) 見出し 2012年
2／10 信頼培い互いに成長
3／11 友に地域に支えられ
避難所生活乗り切り証書

東日本大震災から一年の日に載ったのは，前日（2012 年 3 月 10 日）に県内のほとんどの中学校が迎えた卒業式の記事が多数を占めていた。そもそも東日本大震災の当日（2011 年 3 月 11 日）が中学校の卒業式の集中日であった。

大震災から一年が過ぎるということでマスコミはその直前から特集番組を放映していた。年末の特集番組が津波の映像を繰り返し放映し，その映像を見たことによるフラッシュバック（PTSD の症状）が大きな問題となっていた。実際，実家を津波で失った筆者の家族にもその症状が出ていた。そのため，一周年の特集番組では津波映像は自粛され，もし放映する場合は，放映前に注意を促す配慮がなされるようになっていた。PTSD の症状はやはりこれからが正念場だと感じている。

さて，宮城県が進める共同学習モデル事業として重度の障がい児が通常の学校で学んできたＩさんが卒業を迎えるということで，卒業一か月前と卒業式当日のことが記事になった。記事では，「自宅から離れた特別支援学校ではなく，地元の小学校に入学させたい家族の希望に対し，市教委はなかなか許可を出さなかった。『地域の子どもなのだから，地域で一緒に見守るべきだ』。Ｉさん家族の願いを知った近所の母親たちは，保護者を呼びかけようとM小前で文書を配った。市教委から許可が出たのは，この後すぐだった。」と就学の経緯を伝えている。美談のように見えるが，実はＩさんが入学する頃，浅野史郎前宮城県知事による重度の障がい児を通常の小・中学校に受け入れるモデル事業が始まったのである。好意的な地域の動きを察知してモデル校に指定したのである。

医療的ケアを必要とする児童生徒に看護師を派遣し，通常の学級に一緒に入る教員も配置する手厚い事業であった。県内で 10 事例程度を実施した。しかし，これは「福祉立県」を標榜した浅野県政のアドバルーン的施策であり，制度拡大を希望する多くの声に耳を傾けず，モデル校を増やすことなくＩさんたちが義務教育を終えるとともに自然消滅することとなったのである。そのような経緯には触れることができない地元新聞の限界を感じてしまうところでもある。

6

いのちの地平
「植物状態」を超えて 61

終章存在④

信頼培い互いに成長

地域とともに

東日本大震災で最大5万人が避難所生活をした石巻市。私たちは第5部「震災」で、重度心身障害児の湊中3年伊勢知那子さん(15)を見せてくれた。日付は、知那子さんが小学校に入学する直前の2003年1月末。湊小の保護者に向けたものだ。

〈友達、先生、地域の方々と笑顔を交わし、励まし合って信頼関係をつくり上げてほしいと思っています〉〈彼女はここで生まれ、これから先もここで生きていくのです〉

「地域のお母さんたちに勧められ、初めて考えるようになった」と、知那子さんにできる役割を考えるようになった。

私たちは1月13日、湊中の仮設校舎で知那子さんと再会した。

クラスメートと給食の時間を過ごす伊勢知那子さん。震災後、避難所に身を寄せた知那子さんを同級生や地域の人たちが支えた＝1月13日、石巻市

障害への関心が理解につながり、「運動会は応援ができる」「クラスでは級友、指揮棒をともらおう」と、知那子さんにできる役割を考えるようになった。

私たちは1月13日、湊中の仮設校舎で知那子さんと再会した。

知那子さんは幼児期から重度の知的障害と肢体不自由があり、言葉の理解は難しく、歩くことも困難だ。

「地域の子どもなのだから、地域で一緒に見守るべきだ」。伊勢知那子さんを支えた地域の人たちに願い命をつないでもらった」と母親の理加さん(44)は感謝する。知那子さんを支えた地域とのつながりはどのように育まれたのだろうか。

地元の学校通学

理加さんが私たちに一枚の文書を見せてくれた。日付は、知那子さんが小学校に入学する直前の2003年1月末。湊小の保護者に向けたものだ。

〈友達、先生、地域の方々と笑顔を交わし、励まし合って信頼関係をつくり上げてほしいと思っています〉〈彼女はここで生まれ、これから先もここで生きていくのです〉

「地域のお母さんたちに勧められ、つくった文書なんです」と理加さんは説明する。

自宅から離れた特別支援学校ではなく、地元の小学校に入学させたい家族の希望に対し、市教委はなかなか許可を出さなかった。

「地域の子どもなのだから、地域で一緒に見守るべきだ」。伊勢知那子さん家族の願いを知った近所の母親たちは、保護者に呼び掛けようと湊小前で文書を配った。市教委から許可が出たのは、このすぐ後だった。

外出に回復の芽

生後11カ月の時、離乳食をのどに詰まらせて低酸素脳症になった知那子さんは、家族も就園させたいと願っていた。だが、同年代の子どもとの関わりが増えるにつれ、知那子さんがいる学校が生徒たちの日常になっている。

子どもたちの様子も変わった。

「運動会は応援ができる」「クラスでは級友、指揮棒をともらおう」と、知那子さんにできる役割を考えるようになった。

私たちは1月13日、湊中の仮設校舎で知那子さんと再会した。

給食時間、クラスメート4人がさん33)は7年前から通う。当初機を並べた。「知那ちゃん、ご飯だよ」と話しかけるような知那子さんは、興田玲華さん(15)にほおをさすられ、くすぐったそうな表情をみせた。「知那ちゃんが教室にいないほうが違和感がある」。同じ小中学校に通ってきた興田さんはさらっと言った。

外出先は、衣料品・食料品売り場など同年代の女性が興味のある場所。「デパートに最初どこに行きたい?」と問い掛け、自主性を保ちリハビリも続けた。今は「知那子さんが行きたいところ」と答えるまで回復した。

和田さんが言う。

「地域に出ることが障害者の回復のきっかけ」

友に地域に支えられ

重い障害ある石巻・湊中の伊勢さん

避難所生活乗り切り証書

卒業証書を受け取るため登壇する伊勢知那子さん

肢体不自由があり、言葉の理解も難しい石巻市湊中3年伊勢知那子さん(15)が10日、卒業式に臨んだ。震災後、十月に及んだ避難所生活を、地域の人たちや同級生に支えられて乗り切った。式では、クラスメートが車いすを増し上げ持ち上げ、卒業証書を受け取る知那子さんをサポートした。

卒業式は体育館で行われ、石巻市湊小の体育館であった。

「伊勢知那子さん」。担任の吉田雅美教諭が名前を呼んだ。「はい」と返答したのは同級生90人。発語できない知那子さんに代わり、全員が声をそろえた。

「高さ約1メートルの壇上には、クラスの男子生徒3人が車いすを持ち上げた。吉田教諭は「登壇の手伝いは生徒の提案。自分たちと同じように証書を受け取ってほしいという気持ちの表れ」と説明した。

「地域、同年代の子どもたちのとつながりを大切にしたい」。湊小の希望で地元の湊小学校、湊中学校に通った。

たんの吸引など医療的ケアがかかせない知那子さん。その存在は、生徒たちの接近に対する理解につながった。震災後、同級生や地域の人たちは避難所の知那子さんを頻繁に訪ね、「頑張って」と気遣い、支えた。

「避難所では水も食料もなく気が休まれたときもあったが、何とか地元の学校で義務教育を終えることができたと感慨深げに語る父親の康弘さん(51)。「地域の人たちに優しい障害の子どもの存在を理解してもらえて、本当に良かった」と感謝した。

知那子さんは4月、石巻支援学校高等部に進学する。

7 (1) 見出し 2012年
4／4 復旧の歩み 光と影
仙台・被災の障害者施設
利用者行き場失う恐れ
予想超え損壊，見通し立たず

年度始め早々にショッキングな見出しが福祉関係者を驚かせた。この施設のある仙台市北部N地区は，大震災発生当初から甚大な被害を受けたことは知られていた。同じ地区にあるN小学校はとても危険なためN中学校をはじめとする近隣3校と市民センターに学年単位で分散して授業を行うというとんでもない事態に陥っていた。このことからもN地区の被害の大きさは分かるし，筆者も昨年夏にN地区を実際に歩いてみたことがあり，めくり上がったり亀裂の入ったりしている道路のアスファルト，倒壊寸前の家屋や倒れたブロック塀などN団地造成当時（1978年宮城県沖地震よりも前）の建築基準が仇になった典型であると感じていた。

N地区の被害の大きさに反して着々と再建の準備をしていたにもかかわらず改修工事が始まって3か月程が経ったところで，報道のような事態になった。

次の 8 「5／20福祉施設の震災対応紹介」で触れる冊子によると，この施設の状況は次のとおりであった。

■3.11震災が起きた時の状況

午後の活動中。降所の準備を始めようとしていたところ。ご自身では避難の難しい重度の障害者が多いため，職員は利用者の上に覆いかぶさり，落下物が当たらないように努めた。また，地震が弱まってからは園庭に避難した。

■被害の状況

地盤が20センチほど東側に地すべりを起こした。また，ホール天井の落下や窓枠が吹き飛ぶなど，多くの被害を受けた。利用者は，無事に避難でき怪我などはなかった。家族の迎えが21時ぐらいになった利用者もいた。職員に怪我はなかった。しかし，自宅が被害を受けた職員が数名いる。また，親戚が津波被害を受け，自宅に引き取った方もいる。

■ライフライン・食料について

水道の断水（3月31日復旧）。電気の停電（3月15日復旧）。ガスも止まった（4月18日復旧）。ライフラインが止まっている間は，自宅の水道が復旧した職員がペットボトルなどに水を入れて持参し出勤した。また，電気については，発電機を利用したが，ガソリンがなくなり，2日で使用できなくなった。ガスについては，簡易ガスコンロを利用。

食料は，施設長のつながりで，県外の事業所よりたくさんの支援物資をいただいた。

非常時の備えは，乾パンやアルファー米など備蓄していたが，期間が長期に渡ったため数量が足りなかった。また，発電機を使用するためのガソリンの備蓄がなかった。

■震災時の対応

施設が被害を受けたため，利用者の活動場所の確保が大変だった。活動場所確保のため，施設長が行政と話し合いを実施。また，市民センターやコミュニティーセンターなど空き状況の問い合わせを行った。日頃の避難訓練が活きスムーズに避難することができた。防災マニュアルとしては，備蓄品の見直しを行っている。

この施設の場合，建築許可と補助金申請が終わっているために変更できないという「お役所仕事」の融通のなさに悩まされているのである。

7

復旧の歩み 光と影

仙台・被災の障害者施設

土台から破壊されていたことが分かり，現地再建できなくなった「仙台つどいの家」＝仙台市泉区南光台東

行政支援受け早期に移転・再開

利用者 行き場失う恐れ

予想超え損壊、見通し立たず

東日本大震災で被災した仙台市内の障害者施設の間で，復旧の速度に差が生じている。早い段階で移転を決め，行政の支援を得て再開できた施設がある一方，予想に反して損壊が激しく，現地再建を諦めざるを得ない施設も出てきた。被災から1年以上が経過し，利用者が行き場を失わないよう対策が求められている。

仙台市泉区南光台東の通所更生施設「仙台つどいの家」は地震で天井が崩落したが，現地での再建が可能とみて，ことし1月に改修工事に入った。昨年6月，市が業者に依頼したボーリング調査でも地盤に問題はないとされ，約40人の利用者や家族には「ことし6月には施設を再開できる」と伝えていた。

ところが，工事で建物の下を掘ったところ，基礎は破壊され，コンクリートくいが折れていたことが判明。建物の撤去と大規模な土壌改良が必要だと判断された。

移転の決断を迫られた千郡山和子施設長(72)は「ここまでひどいとは思わなかった」と嘆く。「障害の重い人も多い。近い場所で再開したい」と考えているが，移転先の見通しは立っていない。利用者は近くの市有地に設けたプレハブや同じ法人が運営する別の施設に分かれて，活動する日々が続いている。

一方，津波で全壊し，直後に現地再建を断念した仙台市若林区荒浜の障害者授産施設「まどか荒浜」は，約10キロ離れた太白区長原の市営住宅跡地を無償で借りて，6月末に新施設をオープンさせることになった。

約40人の利用者は現在，新施設の近所にある別法人の施設で活動する。中村正利施設長(79)は「多くの方の支援で，利用者を路頭に迷わせることなく，ここまで来た。本当に感謝している」と話している。

仙台市によると，市内では障害者施設約30カ所が被災した。復旧を急ぐ福祉事業者に対し，市は最大で復旧費の6分の5が助成される制度の利用を呼び掛けている。

市は「市内の施設が一日も早く本格復旧できるように支援したい。利用者のために事業を続ける場合は，一時的な代替施設の相談にも応じている」（障害者支援課）と話している。

8 (1) 見出し 2012年

４／１６支援ネット構築を提言
重症児者の防災ハンドブック

４／２５被災障害者を支援
石巻・女川共同の拠点開所

５／２０福祉施設の震災対応紹介
89ヵ所取材，冊子に

筆者の前任校が併設されている病院の医師が編者の一人である書籍が出版された。『重症児者の防災ハンドブック－3.11を生きぬいた重い障がいのある子どもたち－』（クリエイツかもがわ）である。状況(1)や本稿にたびたび登場する重度の障がい児も登場している。また，編者の一人に 5 で紹介した県内の教員養成大学主催の特別支援教育フォーラムでも報告している研究者（元特別支援学校教員なので現場の感覚に近い方である）がいるので，医療，教育関係者や障害者支援団体，障害者の家族ら計 18 人の震災時の行動記録や，どんな対策が必要だったかがまとまっている。

記事ではこの本の概要を次のようにまとめている。

「東日本大震災で被災した医療的ケアの必要な重症心身障害児への医療・物資支援に奔走した3氏が共同で編集し，著した。震災では，障害者家族と普段からつながりのある医療施設や福祉団体の支援が最も有効だった。災害への供えとして，医療，福祉，行政，家族ごとに個別に対策に取り組むのではなく，それぞれが普段から協力して支援ネットワークを構築すべきだと説く。」

また，福祉避難所についても次のように提案している。

「福祉避難所は，今回の震災では十分に機能しなかった。3氏は，障害者の人数，所在を把握した上で施設をどこに，どれくらい設置する必要があるか指摘。介護する家族の休息などのため障害者が一時入院できるレスパイトを，地域ごとに早急に拡充しなくてはならないと提案する。さらに，『障がい者が当たり前に安心して暮らせる街づくりや支援ネットワークづくり』が復興に必要な要件だと強調する。」

津波による被害が大きかった沿岸部の石巻市・女川町に障害者の生活支援活動に取り組む NPO 法人日本相談支援専門協会（滋賀県）に運営を委託したセンター開所の報道がされた。大震災後の５月から行政と協力して石巻市・女川町の障害者家庭約 1300 戸を訪問し，安否や現状を確認し，その結果，継続支援が必要な障害者が約 450 人いると把握してセンター開設に至ったと報じている。

前の 7 で福祉施設の被害状況について述べたが，その元になっているのが５／２０付で報道された冊子『忘れない　伝えよう　つながろう　東日本大震災の記録・宮城』である。仙台市北部の泉区を中心に 89 施設に取材してまとめものである。元々，1999 年から２年に１度，泉区内の福祉施設などをまとめた情報誌を発行してきた「泉区福祉ガイドブック作成委員会」が，今回は震災特別版として編集したものである。89 の福祉関連施設を取り上げ，被害・復旧状況や震災への対応，課題・教訓などをアンケートし，個別に紹介，障害者や認知症患者の家族ら 15 人の手記も掲載している。

仙台市(人口約 100 万人の政令指定都市)は 5 つの区に分かれている。津波被害の大きかった宮城野区・若林区など記録化するには時間がかかると思われるが，このような取り組みに学んでいく必要がある。

8

重症児者の防災ハンドブック　田中総一郎・武山裕一・菅井裕行　編著

支援ネット構築を提言

東日本大震災で被災した医療的ケアの必要な重症心身障害児への医療・物資支援に奔走した3氏が共同で編集し，著した。震災では，障害者家族と普段からつながりのある医療施設や福祉団体の支援が最も有効だった。災害への供えとして，医療，福祉，行政，家族ごとに個別に対策に取り組むのではなく，それぞれが普段から協力して支援ネットワークを構築すべきだと説く。

医療，教育関係者や障害者支援団体，障害者の家族計18人の震災時の行動記録や，どんな対策が必要だったかがまとめられている。

編集者は，今回の震災では十分に機能しなかった福祉避難所について，障がい者が当たり前に安心して暮らせる街づくりや支援ネットワークづくりが復興に必要な要件だと強調する。

重症児者の防災ハンドブック

福祉施設の震災対応紹介

仙台市の市民グループ「泉区福祉ガイドブック作成委員会」は，東日本大震災の際に同市泉区などの福祉施設が取った対応や，震災支援活動を行う宮城県内外の団体を紹介した冊子「忘れない　伝えよう　つながろう　東日本大震災の記録・宮城」を発刊した。作成委員会は「震災の教訓を後世に伝え，今後の備えに活用してほしい」と話している。

仙台・泉の市民団体

89ヵ所取材、冊子に

作成委員会は1999年から2年に1度，泉区内の福祉施設などをまとめた情報誌を発行してきた。今回は震災特別版として，主婦や学生ら23人の市民スタッフが取材・編集作業を担当した。

冊子はA4判192ページ。記録編，支援編などに分かれ，記録編では高齢者・障害者支援施設などの児童期，保育園などに，泉区を中心に89の福祉関連施設を取り上げた。被害・復旧状況や震災への対応，課題・教訓などをアンケートし，個別に紹介した。

支援編では，震災後に活動している96団体を紹介。高齢者や障害者，児童ら社会的弱者への支援をはじめ，仮設住宅入居者やペットと暮らす人への支援，文化財救出，「募金」事業の助成を掲載している。

編集長の谷田部真理子さん(60)は「震災被害から立ち直れない施設もある。震災後も竜巻などの自然災害が起きており，生活を見直すきっかけにしてほしい」と話す。

連絡先は作成委員会022(218)0745。

被災障害者を支援

石巻、女川共同の拠点開所

障害者の支援活動に当たるセンターのスタッフ

東日本大震災で被災した障害者らを支援する活動拠点として「石巻市・女川町障がい者総合サポートセンター・くるみ」が24日開所し，業務を始めた。

センターは石巻市蛇田の廃業施設の一角に，2市町が共同で設置。障害者の生活支援活動に取り組むNPO法人日本相談支援専門協会(滋賀県)に運営を委託した。

開所式には協会や行政の関係者ら約40人が出席。センターの菊本圭一所長(47)は「寄り添い型の支援で，障害者の復興を手助けしたい」と述べた。

センターは床面積約64平方メートル，事務室と相談室を備える。協会や地元で障害者の相談支援事業を続ける団体のスタッフら7人が交代制で，戸別訪問を中心に活動する。

震災で親族を亡くした障害者の権利擁護や財産管理などもサポートする。

協会は昨年5月から，行政と協力して石巻市と女川町の障害者家庭約1300戸を訪問し，安否や現状を確認してきた。その結果，継続支援の必要な障害者が約450人いると分かり，センターが開設された。

業務時間は午前9

9 (1) 見出し 2012年

6／9 生き生き働く場 再出発

6／9 福祉にやりがい実感

この記事で紹介された福祉作業所には筆者がかかわっている地域ボランティア団体の行事に小学生時代に参加していた青年が働いている。仙台市宮城野区で仙台港に近く，大震災当時は津波で浸水し，すぐ近くでは津波で犠牲になった方が多数出たほど大きな被害があった地域である。その青年と大震災から4か月後に再会したときには作業所も古着のリサイクルなどの業務を再開し，元気そうに働いていたので安心した。

年度が改まってこの福祉作業所でペットボトルをリサイクルし，食品トレーを作るプラントを導入することになった。広島県の食品トレー最大手の企業が被災地支援の一環としてペットボトルを圧縮する減容機を無償提供してくれた。

マスコミの取材が入り，その青年も何度もテレビに映るようになった。彼に会ったとき，嬉しそうに「テレビに3回くらい映ったよ。また映るかもしれない」と話してくれた。ペットボトルのリサイクルが始まったことで一段と張り切っている。

同日の記事で車いすの少年の写真があった。彼は筆者が勤務していた病院併設型特別支援学校に在籍していた卒業生であった。沿岸部の出身だったので心配していたが，この記事で無事を知ることができた。少年の南三陸町の自宅は被災し内陸部の登米市の仮設住宅で家族と暮らしていて，施設で週2回の入浴サービスを受けている。記事はボランティアで車いすの少年を送迎する青年のことを取り上げている。

東日本大震災で失業するまで運送会社で長距離トラックの運転手をしていた青年が，偶然手にしたチラシが福祉への扉を開いたというものである。

働く人全員が事業に出資し，主体的に経営にかかわる「共同労働」の理念を掲げた NPO 法人ワーカーズコープ(東京)が，登米市から受託した雇用創出事業の募集チラシであった。青年は勤め先が津波で被災し，解雇された。住宅ローンを返済しながら家族を養う収入を得るため東京での工事の仕事に単身赴任したものの夫婦に亀裂が入り離婚し，一人になったという。震災が家族の崩壊を招いた。「福祉も起業も，震災がなければ目を向けることがなかった」，「障害者と同じ目線に立ち，就労や生きがいの場を作りたい」と話している。

話が変わるが，『河北新報』の地域版として『石巻かほく』や『気仙沼かほく』，また独立した新聞社として『三陸新報』などがある。漁業の盛んな石巻や気仙沼では遠洋漁船の現在位置を知らせるための新聞が昔からあった。筆者の妻の気仙沼の実家も代々遠洋マグロはえ縄船の船員だったので『河北新報』のほかに『気仙沼かほく』と『三陸新報』をとっていた。家族，親戚，知人の乗る漁船が今どこに居るのか，操業中か移動中かなどを知ることができる。

このような地域新聞の記事でかつての教え子たちの消息を元同僚から伝え聞いたこともあった。名前が出ていなくても障害の状態や置かれた状況から〇〇君のことだと推察できたものもあった。新聞の力を感じるところである。今後も新聞記事に注意していかなくてはならないと思った。

9

ペットボトルをリサイクル

生き生き働く場 再出発

仙台の福祉施設「パンピの杜 蒲生」

仙台市内で障害者の就労支援機関を運営するエコライフ（菊地宏部社長）は21日、津波の被害を受けた宮城野区の作業所「パンピの杜蒲生」で、ペットボトルのリサイクル事業をスタートさせた。

無償提供された機器を前に、テープカットする関係者

津波被害乗り越える

開始式で菊地社長は「障害者がもっと気軽に社会に参加する社会づくりを後押ししたい」とあいさつ。廣山忠夢・仙台市長は「多くの方が生き生きと仕事ができる拠点になって欲しい」と激励した。

当面は10人が作業に従事し、将来は30人程度まで雇用を増やしたい考え。エコライフは市内の企業や学校などに、ペットボトルの提供を呼び掛けている。

古着のリサイクルなどを手掛けていた「パンピの杜 蒲生」は床上浸水し約2カ月、作業停止に追い込まれた。障害者を積極的に雇用する食品トレー最大手のエフピコ（広島県福山市）が、被災地支援の一環として、ペットボトルを圧縮する「減容機」を無償提供した。

利用者の首羽孝志さん（53＝若林区＝）は「新しい作業をどんどん覚え、自信につなげたい」と話した。

福祉にやりがい実感

仲間と事業所開設へ

第12部 興す ③ 転換

—大震災を生きる

施設で入浴サービスを受けた男性（手前）を、登米市の仮設住宅に送り届ける高橋さん

「とにかく絶望」が車内に響く。「うまいなあ、いずれコンサートを開くか」。ハンドルを握る菅原忠さんが、楽しそうに話す。登米市の高橋祐喜さんとその男性（18）に温かなまなざしを向けた。

男性は障害があり、宮城県南三陸町の自宅は被災。登米市の仮設住宅で暮らす。施設で週2回、入浴サービスを受ける。高橋さんがボランティアで車いすの送迎を始めてから2カ月になる。

高橋さんは、NPO法人ワーカーズコープ（東京）の仲間と共に、登米市に障害者の就労を支援する社会福祉事業所の開設を計画する。「ボランティアは、事業所の名称案の一つだ」。障害者と同じ目線に立ち、就労や生きがいの場を作りたい」と意気込む。

82

差別悔やむ

「動く人全員が事業に出資し、主体的に経営にもんは掛ろ」

東日本大震災で失業するまで、東松島市の運送会社で長距離トラックの運転手をしていた。昨年秋に手にしたちらしが、福祉への扉を開いた。

「仕事おこしを学ぼう」

ヘルパー資格も取れる〉

NPOが、登米市から受けた雇用創出事業の募集だった。

「福祉も起業も、震災がなければ目を向けることがなかった」

震災は働く人への暮らしを一変させた。

勤め先は津波で被災し、解雇された。住宅ローンを返済しながら3人

10 (1) 見出し 2012年

6／25 ギョーザに包む再起の心意気
角田の授産施設に手作り販売店

6／28 「まどか荒浜」再開
津波で全壊障害者支援事業所

7／20 障害者視点で防災討論
仙台で福祉大会13人が震災体験紹介

県南部の角田市の社会福祉法人が冷凍ギョーザの製造販売店「バカ美味(うま)ぎょうざ」をオープンさせたことが報道された。ギョーザ作りに取り組んだ経緯が記事では次のように報じられている。

「同会は東日本大震災の津波で多賀城市，山元町にあったピザ店など計3店舗を失った。ギョーザを製造する大阪府東大阪市の社会福祉法人から昨年夏，支援物資としてギョーザを届けられたのがきっかけで，レシピの提供や作り方の指導を受けた。」

続いて，状況(1)でも紹介した仙台市若林区荒浜にあった「まどか荒浜」が市営住宅跡地に建てた新施設で再スタートを切り，利用者 38 人の就労を支援すると報じられた。

前述の 7 で触れた福祉施設の再建状況では対照的に描かれていた良い方の代表格である。記事では，再建の経緯を次のように伝えている。

「被災した旧施設で利用者は無事だったが，女性職員1人が犠牲に。施設を運営する社会福祉法人は昨年3月下旬から，太白区の別の障害者支援事業所の一角を間借りし事業を継続，再建支援を求めて奔走してきた。土地は市から無償貸与されたほか，再建費用の最大6分の5が助成される国の制度などを活用できる見通しも立った。」

また，施設長は次のように話している。

「荒浜に多くの思い入れがあるが，津波の恐怖から逃れられる場所で再建するしかなかった。」

仙台市若林区荒浜は大震災発生直後からラジオで「荒浜地区に 200 ～ 300 の遺体が浮いている」と何度も伝えられた津波被害の恐怖にさらされた地域である。津波ですべてが流されたことで再建に向けて別な場所で取り掛かったのが功を奏し，早期に，新しい場所で，新しい施設での再建に結び付いた好例となった。

障害者福祉の在り方を考える「仙台市障害者福祉大会」が 7 月 13 日，開かれたことが報道された。

パネル討論では，東日本大震災で浮き彫りになった障害者を取り巻く防災体制の不備が報告された。

障害者団体や支援組織の代表者 13 人が震災経験などを紹介した。

市聴覚障害者協会会長は，

「耳が聞こえない人が大津波警報に気づかず，被災したケースがあった。自分が身を寄せた避難所も音声の案内ばかりで，不安が尽きなかった」

と訴えた。

市視覚障害者福祉協会副会長は，

「目が見えない人は，どうしても避難行動に時間が掛かる」

と指摘。

「常日頃から近所との関係を密にし，万が一の時に誘導してもらえるネットワークづくりが不可欠だ」

と強調した。

市障害者福祉協会会長は，

「今回の震災で，それぞれの障害に関する防災面の問題がたくさん見えてきた。地域や行政と連携し，課題を一つ一つ解決していきたい」

と述べた。

10

角田の授産施設に手作り販売店

ギョーザに包む再起の心意気

支援物資きっかけ 目指すは100%地元産

ギョーザ作りに励む施設利用者ら

障害者授産施設を運営する角田市の社会福祉法人「臥生三敬会」（湯村利雄理事長）は20日、冷凍ギョーザの製造販売店「バカ美味（うま）ぎょうざ」を同市角田中島にオープンさせた。

○ ○ ○

臥生三敬会の施設「第3虹の園」の一角に店舗が設けられ、職員1人と施設利用者2人がギョーザの手作りに取り組んでいる。

同会は東日本大震災の津波で多賀城市、山元町にあったピザ店など計3店舗を失った。ギョーザを製造する大阪府東大阪市の社会福祉法人から昨年夏、支援物資としてギョーザを届けられたのがきっかけで、レシピの提供や作り方の指導を受けた。

店のオープンセレモニーで湯村理事長は「将来的に白菜、ニラ、ニンニクなどの食材は全て地元産を使いたい」とあいさつ。現在は大阪市の業者から取り寄せている皮も、自前での製造を目指すという。

営業は月曜から金曜日の午前10時～午後6時。10個入り250円、20個入り500円の2種類がある。連絡先はバカ美味ぎょうざ☎0224(63)4347。

津波で全壊 障害者支援事業所

「まどか荒浜」再開

仙台 袋原 市営住宅跡地に新施設

真新しい建物で事業を再開した「まどか」

東日本大震災の津波で全壊した仙台市若林区荒浜の障害者支援事業所「まどか荒浜」が27日、太白区袋原の市営住宅跡地に建てた新施設で、再スタートを切った。利用者38人の就労を支援する。

施設名は「まどか」に改称。モダンな意匠の木造平屋で、床面積は715平方メートル。中にはクラフトやパンの工房があり、一般の人も利用できるカフェや作品展示スペースなども設けた。

被災した旧施設で利用者は無事だったが、女性職員1人が犠牲に。施設を運営する社会福祉法人「円（まどか）」は昨年3月下旬から、太白区の別の障害者支援事業所の一角を間借りし事業を継続、再建支援を求めて奔走してきた。土地は市から無償貸与されたほか、再建費用の最大6分の5が助成される国の制度などを活用できる見通しも立った。

「荒浜には多くの思い入れがあるが、津波の恐怖から逃れられる場所で再建するしかなかった」と施設長の中村正利さん(79)。「多くの方々の支えでここまで来られた。他の施設や地域住民と手を携えて活動していきたい」と語った。

施設はオープンしたが、利用者が新設の機材に慣れるまでカフェなどは当面開かず、施設の全面稼働は8月中旬以降を見込む。

障害者視点で防災討論

仙台で福祉大会 13人が震災経験紹介

障害者の視点から防災の在り方を考えたパネル討論

障害者福祉の在り方を考える「仙台市障害者福祉大会」（市障害者福祉協会主催）が13日、青葉区の市福祉プラザで開かれた。約100人が参加。

パネル討論では、東日本大震災で浮き彫りになった障害者を取り巻く防災体制の不備が報告された。

障害者団体や支援組織の代表者13人が震災経験などを紹介。市聴覚障害者協会の松本克之会長は「耳が聞こえない人が大津波警報に気づかず、被災したケースがあった。自分が身を寄せた避難所も音声での案内ばかりで、不安が尽きなかった」と訴えた。

市視覚障害者福祉協会の佐久間武副会長は「目が見えない人は、どうしても避難行動に時間が掛かる」と指摘。「常日頃から近所との関係を密にし、万が一の時に誘導してもらえるネットワークづくりが不可欠だ」と強調した。

市障害者福祉協会の阿部一彦会長は「今回の震災で、それぞれの障害に関する防災面の問題がたくさん見えてきた。地域や行政と連携し、課題を一つ一つ解決していきたい」と述べた。

11 (1) 見出し 2012年

7／29 つながり築く「こつ」紹介
仙台市の保護者グループ，冊子作成

新聞記事のリードで次のように書かれている。

「災害や緊急時に備え，障害児・者のいる家族と地域住民とが日常的につながりを築くためのこつを，仙台市の保護者グループが冊子にまとめた。東日本大震災で苦労したことを踏まえ，保護者が困った時に助けを求め，住民が手助けできる関係づくりを分かりやすく解説している。」

冊子を作成したのは仙台市の NPO 法人「アフタースクールぱるけ」の放課後デイサービスやホームヘルプを利用している障害児・者の保護者 11 人とのこと。作成のきっかけは次のとおりである。

「障害のある子どもの保護者が震災の際，避難所に避難できなかったり，給水や炊き出しの列に並べなかったりした経験だ。ぱるけの利用者の中にも震災後に不安感が強くなった自閉症児がいた。保護者は『知らない人が大勢いる避難所ではパニックを起こしかねない』と，家族で数日，車中泊を余儀なくされた。」

障がい児の家族の車中泊の事実がここでも明らかになった。

おわりに

震災から１年４か月あまりがすぎた。私事だが，妻の実家が津波で流失し，この間，義母・義兄家族はばらばらの避難生活を余儀なくされた。まず義兄家族が震災から８か月後にようやくアパートが見つかり一緒に住めるようになった。栃木の親戚宅に２次避難させていた義母は今年の６月になって筆者の自宅近くのアパートを借りて仙台に住むことになった。筆者の自宅は３世代同居で引き取るにも部屋がないのである。筆者たち夫婦や子どもたち（孫たち）や筆者の両親が日替わりで顔を出して高齢の義母の様子を見ている。義母は栃木ではほとんど家を出ないで引きこもってしまっていた。なんとか外に連れ出して気分転換を図りたいと思うが，気仙沼の大島を臨む静かな漁港に面した所で生まれ育った義母に，仙台の市街地の喧騒は辛いようである。特に夏の暑いときにアパートに居て熱中症にならないようにと心配している。アパートにはエアコンが設置されているが海岸の涼しい所で生活していた義母はエアコンを使ったことがないので冷風を嫌ってしまう。多くのお年寄りに見られる傾向であり，このことが熱中症を引き起こす要因ともなっている。暑い日には筆者の両親が義母を冷房の効いた近くのショッピングセンターに連れ出そうとしてくれている。

気仙沼の妻の実家は国定公園の中にあることも関係して自治体としての復興計画が定まらないでいる地域である。高台に畑があるので実家をそこに再建することは可能であるが，地域としての高台移転の計画が不透明なうちに性急に手をつけることの危険性は，石巻市や多賀城市，仙台市沿岸部で起きている住宅再建を先行させた住民と行政側とのトラブルを見ても明らかである。

まだまだこの先何年かかるか分からない状況にもかかわらず復興ムードを盛り上げる行政との温度差を感じている。

東日本大震災と障がい児・者をめぐる状況についてはこれからも様々な課題が出てくるであろう。今後も注意深く見つめていきたい。

11

障害者いる家庭と地域住民、災害・緊急時に備え

つながり築く「こつ」紹介

仙台の保護者グループ、冊子作成

具体例分かりやすく

障害のある子どもの保護者が作成した冊子

災害や緊急時に備え、障害児・者のいる家族と地域住民とが日常的につながりを築くためのこつを、仙台市の保護者グループが冊子にまとめた。東日本大震災で苦労したことを踏まえ、保護者が困った時に助けを求め、住民が手助けできる関係づくりを分かりやすく解説している。

live とうほく

冊子を作成したのは、仙台市のNPO法人「アフタースクールぱるけ」（谷津尚美理事長）の放課後デイサービスやホームヘルプを利用している障害児・者の保護者11人。1月に委員会を発足して議論を重ねた。

冊子はA5判。両面から読める仕組みで、片側は一般の人向けに7ページ。障害児・者が近くにいた場合の見守り、声掛け、手助けの心構えをイラストでまとめた。

もう片側は障害児・者の家族向けに6ページの構成。支援を受けるこつを中心に、普段から地域の行事に参加して顔見知りを増やし、困った時に支援してほしいことをコンパクトに伝える方法を紹介している。

具体的には、子どもの日常の様子を手帳に書き留めたり、子どもの特徴を地域の人に伝えたりしておく。コミュニケーションの仕方や苦手なこと、危険認知度などのポイントを記入した「緊急サポートシート」を作り、分かりやすい場所に置くことを勧めている。

震災がきっかけ

冊子作成のきっかけは、障害のある子どもの保護者が震災の際、避難所に避難できなかったり、給水や炊き出しの列に並べなかったりした経験だ。

ぱるけの利用者の中にも震災後に不安感が強くなった自閉症児がいた。保護者は「知らない人が大勢いる避難所ではパニックを起こしかねない」と、家族で数日、車中泊を余儀なくされた。

ぱるけの谷津理事長は、仙台市の放課後ケアか児童クラブを利用している世帯にアンケートを取った。震災後の子どもの様子で「困ったことがある」と回答したのは障害児がいる世帯では57%に上り、その他の世帯の26%を大きく上回った。

障害児・者の多くは、住んでいる地域から離れた支援学校や通所施設に通っている。そのため地域の人たちとの交流が乏しく、地域の中で障害について十分に理解されないケースが多い。

谷津理事長は「保護者と話し合いを重ねるうち、地域の人の支援を受けやすくする冊子を作ることになった」と言う。

近所の人に感謝

冊子の作成に携わった委員の一人、泉区の宮川亜津子さん(46)は、長男の信広さん(19)に肢体不自由と知的障害があり、地域との関わりが少なかった。宮川さんは「震災の時は、誰を頼ればよいのか分からず不安だった」と打ち明ける。

幸い、宮川さん親子が車いすで出掛ける姿を日ごろから見ていた近所の人がパンなどの食料を届けてくれた。「とても感謝しているし、その方々にも冊子を読んでもらいたい」と語る。

今回の冊子について、仙台市北部発達相談支援センターの佐藤幸子所長は「支援を受ける側の家族が作ったことが重要だ。情報交換をしながら冊子の活用法を考えたい」と話している。

冊子に関する連絡先は、ぱるけ022(233)8425。

（生活文化部・石田浩司）

声掛け・手助け・意思伝達法など